

# 再建された宮古庁舎の新施設でヒラメの増殖研究が本格始動！

ヒラメは我が国の重要な漁獲資源であり、平成24年度には東京都と沖縄県を除く全ての沿岸道府県で合計1,549万尾の稚魚が放流されました。全国のヒラメ稚魚の放流数は平成7年度にマダイを上回って以降、常に海産魚の中でトップであり、まさに「不動のセンター」としての地位を維持しています。

本種は東北太平洋海域において特に重要視されており、震災が発生した平成22年度には全国で放流された1,994.1万尾のうち、約3割にあたる624.5万尾が青森、岩手、宮城、福島、茨城の5県に放流されていました。岩手県、宮城県、福島県では震災で種苗生産施設が全壊しましたが、施設の再建と種苗放流の再開が進められています。

岩手県宮古市にある我々の施設も震災で全壊しましたが、昨年に再建され、本年度からヒラメの増殖研究を本格的に再開しました。



写真1 再建された東北水産研究所宮古庁舎の全体図（模型）とヒラメ稚魚の飼育水槽（右下）

写真1は再建された施設の模型です。いくつかある建屋のうち、ヒラメの親魚と稚魚は左奥の最も大きな建屋（赤丸）で飼育しています。

ヒラメはふ化直後には一般的な魚と同じように目が体の両側についていますが（写真2）、成長とともに右側の眼球が体の左側に移動して

1か月ほどで親と同じ体形に変わります。与える餌もワムシ→アルテミア→配合飼料と魚の大きさに合わせて種類と量を変えていくのですが、多すぎても少なすぎても魚の体調を崩す原因となりますので、飼育中は気が抜けない日々が続きます。

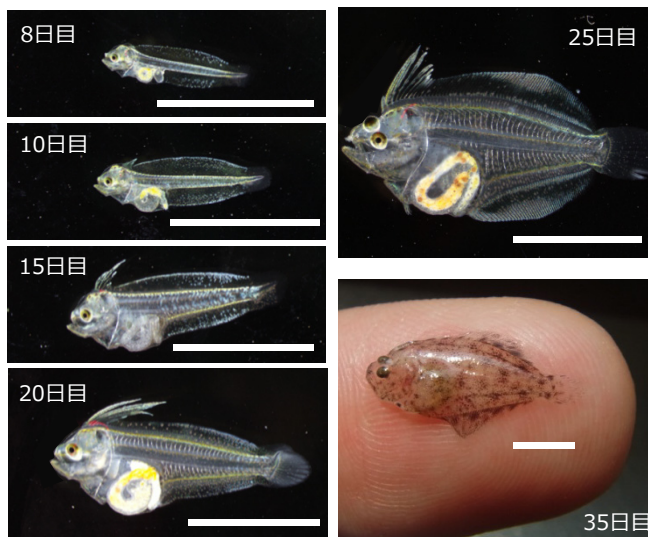


写真2 宮古庁舎で飼育しているヒラメ仔魚の成長（図中のスケールは5mm）

ヒラメ稚魚の放流サイズは機関により大きく異なり、全長3cmから大きいものでは10cm以上になります。稚魚のサイズが小さければコストは安く済みますが、放流後の生き残りが悪くなります。また、放流する時期や場所も稚魚の生き残りに大きく影響します。どのような条件で放流すれば効率よく資源を増やすことができるのか、難しい問題ではありますが、我々の育てた稚魚の放流試験を通じて解明していきます。

（沿岸漁業資源研究センター 資源増殖グループ 藤浪祐一郎）



藤浪 祐一郎 主任研究員

## 東北水産研究レター No.33（平成26年9月発行）

（編集）独立行政法人水産総合研究センター 東北水産研究所 業務推進部（発行）独立行政法人水産総合研究センター 〒985-0001 宮城県塩釜市新浜町3-27-5 TEL. 022-365-1191 FAX. 022-367-1250

ホームページ <http://tnfri.fra.affrc.go.jp/>